



白他の命を大切にしながら、命の電池が尽きるまで精一杯！

今朝、臨時集会を開きました。そして、発達段階に応じて「命」について考えてもらいました。最初に、小児がんで 11 歳という短い生涯を終えた宮越由貴奈さんの、「命」という詩を紹介します。

命はとても大切だ / 人間が生きていくための電池みたいだ
でも電池はいつか切れる / 命もいつかはなくなる
電池はすぐにとりかえられるけど / 命はそう簡単にはとりかえられない
何年も何年も / 月日がたってやっと / 神様からあたえられるものだ
命がないと人間は生きられない
でも / 「命なんかいらない。」 / と言って
命をむだにする人もいる / まだたくさん命がつかえるのに
そんな人を見ると悲しくなる / 命は休むことなく働いているのに
だから 私は命が疲れたと言うまで / せいっぱい生きよう



由貴奈さんは、5歳のときに小児がんの診断を受けました。それから5年半もの間、入退院を繰り返して、何度にもわたる手術や苦しい治療を受けました。

由貴奈さんがこの詩を書いた頃、テレビで流れるニュースと言えば、毎日のようにいじめだとか自殺だとかが多く伝えられていました。一方、病院に入院している子どもたちは、苦い薬を飲み痛い治療も我慢して、頑張っている子ばかりです。ただ、昨日まで一緒に遊んでいた友達が、突然いなくなることもあったと言います。「生きてくても生きられない子がいるのに、なんで自殺したり人を殺したりするのかあ？なんでお友だちをいじめめるの？」と感想を漏らしたそうです。

ちょうどその頃、院内学級の理科の授業で乾電池の実験をしました。先生の指示どおりに電池を並べてつなぐと、豆電球がピカッと光ります。スイッチを押すのに合わせて、電球がまたたきました。わくわくした気持ちで実験をしながら、「そうか！電池は大切に使うと長持ちするんだ。使えなくなったら、新しいのと交換すればいい。」そう考えたそうです。

この時、由貴奈さんは、自分たちの命がまるで乾電池のようだと気づきました。でも、命の電池は交換することができません。「自分の命も、友だちの命も大事にしよう！病気でも頑張ろう！」

由貴奈さんは、この時の気持ちを忘れませんでした。そして、自分の通っている学校の国語の時間に、上掲の詩「命」を書いたのです。そして、詩のとおり精一杯生きたと言います。

※引用；「電池が切れるまで」（角川つばさ文庫）

以下省略

